

言語文化伝承論特殊研究

担当者：坂本 信幸（文学部・教授）

開講時期：後期

週時間：木曜7・8時限

履修者数：24名

授業概要

奈良女子大学の立地する奈良という地は、日本最古のアンソロジーである『万葉集』や、漢詩集『懐風藻』、説話集『日本霊異記』、また、史書である『古事記』『日本書紀』が作られた土地です。なかでも、『万葉集』は、日本文学の中心をなす作品として、こんにちまで多くの人々に愛され続けてきています。『万葉集』は、天皇から東国の農民までと、その作者層は広く、また歌われた場所も、北は東北から南は九州まで、美作・伯耆・隠岐・出羽・北海道を除く41都府県に及んでおり、広い風土の地盤に結びついています。しかしながら、その歌々の多くは奈良の地で生まれたもので、万葉故地の総地名数1,200のうち、奈良県は4分の1にあたるおよそ300の地名を数えます。いわば、県内のいたるところが万葉の故地であり、特に平城京の営まれた古都である奈良市は観光における地域資源の豊かな地といえます。それ故、「古都奈良における生活観光 - 地域資源を活用した全学的教育プログラム - 」においては、『万葉集』についての知見を生活観光の中に活かす必要があるといえるでしょう。

目的

「言語文化伝承論特殊研究」では、「古都奈良の地域資源を現代的視点から学ぶ」という観点から、現代における万葉故地の意味を考えることを目的の一つとする講義です。

万葉故地は、早く「歌枕」（歌を詠むときの典拠とすべき枕詞・名所など。古歌に詠みこまれた諸国の名所）という歌に詠み込まれた「名所」の観念を生んできました。中世和歌や近世和歌、俳諧 西行や芭蕉などに歌枕の観念は受け継がれ、それらの作品とともに、歌枕の地は日本文化を愛する人々によって訪ねるべき地となり、旅行地としてこんにちの総合的な国民のレジャー文化を豊にかつ高度に育んできたといえます。そういった現代に生きている古典の様相を、見直すことも目的の一つです。

スケジュール

日程	内容
10月	姫島松原娘子挽歌について
11月	志貴皇子挽歌について 志貴皇子関係万葉故地について
12月	巻三冒頭の柿本人麻呂の天皇讃歌（明日香村雷丘の万葉歌） 志斐姫のしひ語り
1月	人麻呂の長皇子讃歌（桜井市鹿路の万葉歌） 弓削皇子の憂情（吉野の万葉歌）
2月	人麻呂の旅の歌

取組内容・成果

1. 万葉故地「白毫寺」

講義では、万葉故地を大切に、景観を復元することが新たな奈良の観光資源となった一つの例として、萩の寺として全国に知られている白毫寺をとりあげ、そのもとになった笠金村の志貴皇子挽歌（巻二・二三〇～二三二）について説明を加えました。

白毫寺は、長歌に歌われた高円山の麓に所在し、もと志貴皇子の山荘があった場所と伝えられています。境内には犬養孝博士の揮毫になる二三一の歌碑

高円の 野辺の秋萩 いたづらに 咲きか散るらむ 見る人なしに（2・二三一）

がありますが、その歌に詠まれているようにこの辺りには万葉の時代に萩が生い繁っていたと考えられ、積極

的に参道や境内に萩を植栽し育てていったことが、一つの観光地を生んだのです。そこには、白毫寺の建造物としての趣と、萩の美しさが意味をもっているわけですが、それに加えて、そこが万葉故地としての伝統的文化をもっていることが大きく関わっていると思われます。

講義では、挽歌の対象である志貴皇子の権びの御歌

石走る 垂水の上の さわらびの 萌え出づる春に なりにけるかも(8・一四一八)

にも触れ、奈良市田原にある志貴皇子の御陵である「田原西陵」、および志貴皇子の子である光仁天皇の田原東陵、また太安万侶の墓への文学散歩を計画しました。田原は、茶畑の美しいところで、川瀬直美監督の「殞の森」の撮影地でもあり、今後観光地として展開できる場所です。

なお、知的クラスター事業の一環として坂本が作成したDVD『万葉の道(山辺の道編)』を利用してバーチャルウォークを行いました。次年度は、学生の実地踏査を促したく思っています。



2. 万葉故地「龍田山」

奈良女子大学は、早くから地域貢献特別支援事業の一つとして「万葉故地のデータ化と歴史的景観保全事業」に取り組み、奈良の歴史的風土景観の保存意識の向上を図るとともに、地域の観光資源開発に貢献してきています。その事業の一つとして、万葉故地に新たに歌碑を建立することをを行っています。昨年度は、三郷町・龍田大社との協働で三郷町立野の龍田大社境内に万葉歌碑を建立しましたので、講義にもその歌碑の歌をとりあげました。歌碑の歌は高橋虫麻呂の長歌、

島山を い行き巡れる 川沿ひの 岡辺の道ゆ 昨日こそ 我が越え来しか
一夜のみ 寝たりしからに 峰の上の 桜の花は 瀧の瀬ゆ 散り落ちて流る
君が見む その日までには 山おろしの 風な吹きそと うち越えて
名に負へる社に 風祭りせな(万葉集巻九・一七五一)

です。高橋虫麻呂は万葉後期の伝説歌人として有名で、万葉集に、長歌15首、短歌20首、旋頭歌1首の合計26首の歌を残しています。そのうち奈良の万葉故地である「龍田」に関する歌は、長歌・反歌あわせて8首を伝え、龍田という地をもっとも多く詠んだ歌人です。こんにち龍田は紅葉で有名ですが、万葉の龍田は桜花で知られており、虫麻呂の龍田歌も、桜花が詠まれたものは8首中7首にも及んでいます。地元では、桜の名所としての龍田を再現しようとして、龍田・三室山桜の会(代表益田宗児氏)が中心となって、龍田古道沿線に桜の植樹を行っています。今回奈良女子大学が建碑した歌碑は、碑石の選択や刻字・設置などを、「国内外の石造り遺跡の修復や発掘に独学で技術を開発し、数多くの文化財の保存に尽力」した功績で平成19年度(第41回)吉川英治文化賞を受賞した飛鳥建設の左野勝司氏にお任せし、風韻のある歌碑となっています。左野氏は高松塚古墳の石室解体修理に関わって平成19年度の文化庁長官表彰を受けましたが、その責任者として多忙を極める中、御尽力下さったのです。現代の名工の職人としての技によって、三郷町立野に新しい観光スポットが形作られたわけです。



龍田大社境内の万葉歌碑

今後に向けて

今後は、特に奈良市内の万葉故地に焦点を当てて、それぞれの故地について学生による調査を実施し、市内万葉故地案内冊子の作成を行おうと考えています。また、奈良女子大学地域貢献事業と連携して、「シンプルウォーカー」によるデジタル万葉散歩の作成を行い、奈良女子大学のホームページから、発信しようとして計画しています。平成19年度は「特殊研究」の講義での推進でしたが、万葉集についての概説的な知識が必要で、平成20年度は「上代国文学講読」の講義の中でそれを推進する予定です。